

里山に淡く色づく可憐な花

ひめさゆりの沿革

ひめさゆりは、100年以上前に海外で有名になり、大正時代から多くの球根が輸出されていました。

しかし、当時はその生態は謎に包まれ、栽培することが極めて難しかったことから、山から球根を掘り出し出荷していました。また、球根は、終戦直後には食用としても利用されました。以来、乱獲と盗掘、環境の変化などにより、生息地は激減しました。

さらには、とてもデリケートで、暑さと雑菌などに弱いため、現在では、保護地や人里離れた山奥でしか見ることが出来ません。

本町では、南郷地域の高清水自然公園や南郷スキー場、南限とされている伊南地域の高畑スキー場などでその姿を楽しむことができます。

成長と特徴

ひめさゆりは種で繁殖します。秋に地面に落ちた種が、地中に入り、翌年根が生えて小さな球根をつけます。3年目の春、一片の葉が地表に現れ、翌年その葉が育ち、日光を浴びて球根に養分を蓄えます。5年目、茎を伸ばし葉も2〜3枚に増え、球根が成長します。6年目には葉が5〜6枚に増え、ようやく1輪の花をつけます。

このように1輪の花が咲くまでに長い月日がかかります。そして、その翌年からは球根の成長に伴い、花が増えていきます。

ひめさゆりという花

緑豊かとなるこの時期に、鮮やかな若葉の中で、淡い可憐な紅色の花をつけ、甘く濃厚な香りを漂わせる野生のユリ。

一般的には、オトメユリとも呼ばれていますが、この地域ではひめさゆりの名で親しまれています。

この花は日本固有種で、福島県と宮城県南部、新潟県、山形県が県境を接する、限られた地域にしか生息していない希少な植物で、環境省のレッドリストで準絶滅危惧種に指定されています。

本号では、そんな貴重な花“ひめさゆり”と、その美しさに魅せられた人々をご紹介します。

50年近く前、青木さんはひめさゆりに出会い、その美しさに魅せられました。

以降、群生地などを訪れるようになりましたが、10年余り前、少しずつ、個体数が減っていることに気がつきました。

「この景色を守っていきたい。」という思いから、個体数の減少について行政に相談。行政と連携しながら、専門家等に指示を仰ぎ、獣害対策や群生地の管理などさまざまな対策を講じてきました。

その甲斐あってか、現在では個体数も少しずつ戻ってきていると話します。

群生地を守るべく



ひめさゆり案内人

青木 泰さん



そんな青木さんの思いに賛同した人々が、一人またひとりと集まり、ひめさゆり案内人として活動しています。

メンバーは講習会を受け、ボランティアガイドとして、訪れた人々に美しさや特徴などを伝えています。

また、ひめさゆりは雑菌などに弱いことがわかっています。

「可憐な花ですが、とてもデリケートな側面も持ち合わせています。この花を今後も残していくためにも、入園する際は案内人の指示や注意事項を確認し、ひめさゆりを楽しんでほしい。」と注意を呼びかけています。

開園期間：6月15日（土）～30日（日）

入園料：1人500円(中学生以下無料)

問合せ：南郷観光センター

電話：0241-64-5811

開園時間：午前8時～午後4時

ひめさゆりの
開花状況はコチラ▶
(町ホームページ)



第29回 ひめさゆり祭の開催！

6月19日から30日まで、ひめさゆり祭が高清水自然公園にて開催されます。期間中は、ボランティアガイドの皆さんによる群生地の案内（土日限定）や、ひめさゆり・工芸品などの販売も行っています。



伝統文化を継承する「第4回南郷刺し子絆纏」



南郷地域を中心とした伊南川流域で着用されてきた「刺し子絆纏」。その刺し子文化の継承を目指して、南郷地域の有志により「南郷刺し子会」が結成され、会員によって多くの刺し子絆纏が製作されてきました。ひめさゆり祭期間中、作品の展示会が奥会津博物館南郷館で同時開催されます。貴重な作品に触れることができる絶好の機会ですので、ぜひご来場ください。

開園期間：6月19日（水）～30日（日） 午前9時30分～午後2時30分 ※火曜日休館

入館料：1人300円(一般) ※高清水自然公園ひめさゆり群生地の入場券提示で入館料が無料

天空の ひめさゆり

- 高清水自然公園 -



南郷地域界地区にある高清水自然公園ひめさゆり群生地では、毎年、6月中旬から辺り一面に咲くひめさゆりを鑑賞することができます。標高918mの山の上に草原が広がり、地形がすり鉢状になっているため、遠くまで広がる青空の中に群生しているひめさゆりは圧巻です。その景色から、「天空のひめさゆり」の愛称で親しまれています。

この群生地は、かつては地元集落の茅葺き屋根の材料を採取する茅刈り場で、毎年、火入れ、刈払いをした結果、人々との共生関係によりひめさゆりが群生するのに適した環境が形成されました。

平成3年、高清水自然公園として一体的に整備され、群生地として一般公開されるようになりました。

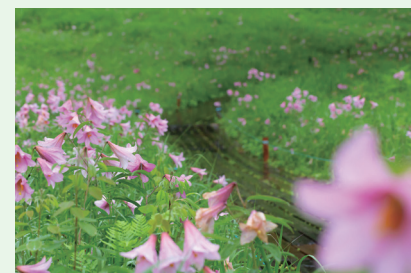


5月27日、「高清水自然公園ひめさゆり群生地」が全国草原の里市町村連絡協議会が主催する「未来に残したい草原の里100選」に選ばれました。

草原の里100選は全国に残る草原に光を当て、その歴史や人々の思いを次世代に受け継ぐ目的で、有識者による選定を行っており、町内では昨年度選定された「鉢山」に引き続き2箇所目となります。

今回選定されたことをきっかけに、草原の里として全国の皆さまに知ってもらえるようしっかり未来につなげていきます。

未来に残したい
草原の里100選



ひめさゆりに 魅せられて

— 静かに耕した夢 —



ひめさゆりを語る上で、欠かせない人がいます。栽培が極めて難しいとされていたひめさゆりを、親子2代、山の上の農園で成功させた、月田禮次郎さんです。

集落から数キロ離れた山の中に広く開墾された月田農園があります。お話をうかがいに行くと、案内された山小屋の中で、炉に薪をくべながら、一つひとつ紐解くように、親子で叶えた夢について話してくれました。

「今思えば、大きな賭けだったね。いろんな人のおかげで、少しずつ栽培方法は分かってきていたが、確信はなかった」

これまでの経験や研究から得た成果をもとに、丁寧に愛情を込めて花の世話をする、昭和60年に畑3反（900坪）、一面に花をつけたのです。

出荷することが出来るようになると、市場では人気を集めるようになりました。

しかし、開花期間が短く1週間程度しか咲かないという問題がありました。これを解決すべく、禮次郎さんは品種改良にも取り組みました。

ひめさゆりは、各自生地域ごとに形態的な違いがあったことから、まずは収集から始めました。

研究者などからの情報提供を頼りに、栽培と同様に試行錯誤を繰り返し、早生から晩生の系統を選抜して、開花期間を3週間あまりに伸ばすことに成功。

茂さんが、見いだした栽培方法を、禮次郎さんが確立させました。

確立した栽培技術は、いくつかの自生地に伝えられ、自生地の保護や地域振興に寄与してきました。また、昭和50年以降、いくつか

ひめさゆりに

命を燃やした父の背中

始まりは、父の茂さんの「目の前を全部ピンクの花でいっぱいしたい」という思いからでした。

当時、植林していた山に悠然と咲くひめさゆりを見た時、その美しさに惹かれ栽培を決意しました。

しかし、ひめさゆりはよく病気がでること、同じ場所で連作がでないことなど、栽培が極めて難しいと言われていました。

そこで茂さんは、昭和34年に林を開墾し、自生地に近い環境の畑を整備します。そして、山に自生していたユリの球根を200球掘り出し、切り開いた畑に移植し試作を試みます。すると、数年が立つても花は咲き続けたのです。

昭和39年からは、禮次郎さんも加わり、現在の農園を少しずつ開墾しながら移植。2人で本格的な増殖に取り組みます。

「私も自分の手で、畑いっぱいピンクの花で染めてみたいと、父と同じ思いだったね」

花をつけるまで、年月を要すること、育成環境が特殊であることから、何年も試行錯誤を繰り返し、本格的な栽培を始めて10年余りた



芽を出し始めるユリ

の研究機関で、ひめさゆりの研究が行われてきましたが、その研究に使用された球根の大半は月田農園から供給されたものでした。

その結果、ひめさゆりの生理生態系が明らかに、新たな栽培方法の確立にも貢献することとなりました。

そんな中、10数年前、イノシシの被害に直面。ほとんどの球根を失いました。

「自然の中で育てているからこればかりはねえ。またひとつ勉強することが増えたよ」

残った球根を少しずつ増殖しました。今では大学を卒業後、ともに農園も運営している息子さんと、栽培や対策に取り組み、出荷数も年々増えてきています。

ひめさゆりとその系譜は、着実に受け継がれているのです。

った昭和51年に、ようやく球根を出荷することができるよう。

その間、茂さんは研究者や農家など、ユリに詳しいという話を聞けば、何処へでも行ったそうです。

また、球根を出荷すると、大学教授や企業などのユリの研究家が農園を訪れてくるようになりました。そこで得た情報を参考に、栽培方法を模索していきました。

昭和53年のある日、いつまでも帰ってこない父が気になり畑へ向かうと、自分たちが切り開いた畑一面に、艶やかなピンクの花が夕日に照らされながら広がり、それをじっと眺める父の背中がありました。後に、茂さんはその日のことをこう綴ったそうです。

「静耕20年、乙女花咲く」と。

「成功」ではなく、「静耕」と綴ったのは、積み重ねた日々を物語っているように思えました。

「あの日のことは忘れられないね。父と2人、山の中でひっそりと畑を耕し、観察と研究を繰り返した」と、少し下を向き、笑みを隠すように、その日のことを回想している禮次郎さん。足掛け20年、2人の夢が叶った瞬間でした。

禮次郎さんもまた、その場からしばらく動けずにいきました。

未知を楽しむ

里山の博士

「面白いものがあるから見てみないか」禮次郎さんが立ち上がりました。

見せてくれたのは、動物の頭骨や昆虫、蛇の標本でした。

「この山に入り60年が過ぎた。ひめさゆりのことを知るために、山やそこに住む生き物、そして、自然について知らなければならな

いと思い、研究をした」

気になることがあれば追求し、試したいことがあれば実験をする。花や昆虫、鳥、獣、樹木、にいたるまで、その知識は、そこにあるほとんどのものに精通してい

栽培技術の確立と

受け継がれる系譜

昭和57年、禮次郎さんは大きな決断をします。当時の月田農園はひめさゆりの球根を主力に出荷しており、切り花の出荷までは至っていませんでした。

そこで、出荷していた球根の大半（約3000球）を栽培にあて、切り花の栽培を試みたのです。

で、まさに里山の博士という言葉がぴったりでした。

そんなこともあり、月田農園は子どもたちの自然体験学習の場としても慕われてきました。小屋の壁には、お礼の手紙や色紙がびっしりと飾られています。

「私にとつてこの山は遊び場のような場所だと思う。よく知人に、誰もいない山の中の作業は寂しくないのかと聞かれたが、全く寂しいなんて思わなかった。知識を深めることや、珍しいものに出会うことは心がわくわくする」

そう語り、いたずらに笑う姿は、山と生き物をこよなく愛し、未知を楽しんでいる、そんなように映りました。



月田 禮次郎 さん

